

故 村上省三先生を偲んで

十字 猛夫

日本輸血学会会長、日本赤十字社中央血液センター 所長

本学会の母体となった日本組織適合性研究会の初代会長を務められた村上省三先生は、去る平成11年12月24日に、御病気のため御逝去されました。

先生は広島県の御出身で、昭和14年に東京帝国大学医学部医学科を御卒業になられ、すぐ海軍に入られ、海軍軍医中尉として任官され、中国、東南アジアで軍務につかれ、九死に一生を得られるような危険な任務につかれたこともあったと伺っております。

昭和21年6月に南方から復員され、東京大学医学部血清学教室に大学院生として入局され、緒方富雄教授の指導の下に、免疫血清学の研究をされました。研究テーマはシュワルツマン現象であったと伺っております。日本赤十字社が東京血液銀行を日赤中央病院内に開設した翌年(昭和28年)に、どう輸血研究所研究部長に就任され、それ以来、輸血を一生のお仕事とされ、我が国の輸血学、輸血医療の先駆者とし、多大な貢献をされました。昭和40年には、日赤の血液事業全体を技術的に指導統括する日本赤十字社技監に就任されました。昭和41年6月に東京大学医学部講師、付属病院輸血部副部長に就されました。この当時先生の御研究はHLA抗原で、顆粒球凝集反応法で、HLA抗体のスクリーニングを始められました。1960年代の中頃といえば、国際組織適合性の第1回ワークショップが開かれた頃であり、日本でいえばHLAの神代の時代といえましょう。昭和43年には東京女子医大輸血部教授に就任されました。こちらでも顆粒球凝集反応法で抗HLA抗体をスクリーニングされておられました。これらの結果は輸血学会等で御発表になられ、またRose Payneとも海外で会われて、お話をされたといいました。十数年後に私が東京女子医大輸血部に先

生の後任として着任して、先生のスクリーニングされた抗血清を使わせていただきました。このように村上先生は、HLA検査の重要性を1960年代中頃から率先して考えられ、現場でも手を動かしてこられました。その先見性には実に頭が下がります。また先生は、まれにみる勉強家でありまして、女子医大退任後も毎日図書館につめて、文献を読んでおられました。HIVに関しましても、我が国で全く問題視されていない頃、外国で変な病気があって、血液を介して伝播するらしいとの情報を厚生省の担当課長にお伝えになっておられました。

輸血学において村上先生は我が国における創始者でありまして、昭和27年に日本血液銀行運営研究会を作られ、それが昭和32年に日本輸血学会と改称され今日に至っていますが、発足当時から幹事として会務を統括され、昭和54年からは日本輸血学会会長として文字通り日本の輸血医学の牽引車でありました。

先生は、きわめて倫理感の強い方で、戦後我が国の輸血医療は、売血制度によって支えられてきましたが、その弊害を除き、無償の献血制度に変革すべきと考えられ、率先してこの方向で努力され、先進国として恥しくない献血制度を確立されました。

このように、村上先生の我が国の輸血医学に尽くされた貢献は枚挙のいとまないほど、絶大でありました。

ここに先生の偉業に心からなる感謝を捧げるとともに、先生の御冥福を切にお祈り申し上げ、追悼の辞とさせていただきます。